
雨のち虹のち晴れ

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨のち虹のち晴れ

【Zマーク】

Z5275A

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

彼女の感じているものは、いつか自分も感じていたもの。

トタトタと轟がしい足音をたてながら、四才くらいの女の子が駆けてくる。

手には、アイスクリーミーが上にのったコーンを危なげに持っている。何を急いでいるのかは分からぬが、とにかく必死だ。

右足と左足を器用に、交互に出すことができず、やりくりと歩くのが愛らしい。

せっかくのアイスには手をつけず。半ば溶けかけていくソレは今にも崩れ落ちそうだ。

ビーダマみたいにキラキラとした瞳には何が写っているんだ？。

やがて、アイスは本格的に溶けて液体になつて彼女の手を汚した。

彼女は、それでも歩みを止めずに「チラに向かつていた。

届かない距離がもじかしく。何もできない自分がいた。

昔は、私もいろいろなものを見聞きし、感じていたはずなのに、今では歩くのもままならない年寄りになつてしまつた。

朝霧には虹が浮かび上がり、びつやつアレに触るのか考えたりしていた。

ちゅうじゅう彼女のよつに一歩一歩を躊躇わざに歩けた。

アイスはもつ、見る影もなく、コーンですらグチャグチャになつていた。

彼女はもつ、すぐ傍まで来ていた。

「にゃんにゃん、可愛い。」

私は愕然とした、彼女の目指していたのは老衰した猫だったのだ。

半分以上は開かない皿蓋で彼女を見上げて声にならない擦れた音で泣いた。

虹のよう、美しくて汚れのないもの。

私も彼女にとつてそつゆつ存在になれたのだろうか。

汚れた体に触れるのに躊躇いなどはない、ただひたすら私の体は彼女の手の中についた。

ベトベトしたアイスクリームと彼女の体温は何年も感じたことなかつた優しさが溢れていた。

汚い汚いと、箸で追い払われて、時にはホースで水をかけられて、若い猫には躊躇しがられた。

そうゆう人生しかないのだと思つていた。現実には虹なんか触れやしない。

夢は夢でしかないと思つていた。

彼女の体温とバニラの淡い香りをいつぱいに受けて、これこそが私が求めたものだつたんだと気が付いた。

幼い彼女もいつか気付くだらうか、理想の向こうの現実とさうしてその向こうにある至福に…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5275a/>

雨のち虹のち晴れ

2010年10月24日02時09分発行